

次ページへ続く

Continued on next page...

影印・古活字版『大坂物語』零本

——稀本零葉集索引稿番外——

渡 辺 守 邦
竹 下 義 人
樹 下 文 隆

いわゆる稀本零葉集——零本の内から作品を選び、一葉ごとを抜いて作った貼込帖——を集成し、索引化してみようとするわれわれの試みは、書誌学にとって貴重なこの資料を、国文学の利用に供してみたいと考えたところに発した。そして、すでに散逸したと信じられてきた版本やキリシタン版を含む稀観書のいくつかを、零葉のかたちではあるが、発掘することができた。

しかし、この集成は、国文学者よりもむしろ、古書を扱うことを業務とする人々の関心を引いたものようである。これは、どうやら、稀本零葉集というものが自分で持つ宿命であった、という気がしてならない。

その嚆矢とすることのできる『玉屑集』（明治四三〜大正一〇）は、書物愛好家たち、より正確には書痴（ビブリオ・マニア）と書豚（ビブリオ・コション）の集り、によって作られたものであった。そして、『古

梓残葉』（昭和四）『古雕聚葉』（昭和五）など、また同類の試みであったものの、その後は、古書店の店主や店員たちによって、商品知識の修得と商品見本の手控え作成のために行われる、という傾向が主流であった、といえるのではあるまいか。

それゆえ、古活字版を対象にした新たな零葉集の刊行という企画が出現して、われわれ編者たちを戸惑わせることになったのも、けだし当然であったのかもしれない。新しい零葉集がいかなる内容になるのか、その全貌は不明であるが、いずれ刊行のあかつきには、本索引稿に収めることにしたいと考えている。

垣間見をさせてもらった新企画の内に見出した、注目に値する一点を、ここに紹介しようとするのであるが、それは、出版のお先棒を担ごうがためではない。零葉集刊行時には、貴重と思われるこの一冊が、本とし

ての体裁を消失してしまっているはずだから、である。解体の中止を申し出てみたものの、無駄であった。稀覯であるからこそ、除外するわけにはいかない、との答えは、それなりの説得力を持つ。いまわれわれにできるのは、哀憐の情を抑えながら、該本の姿を紙上にとどめてやること以外にない。

*

注目に値する資料とは、古活字版『大坂物語』の零本である。この新出本が、六種九版あるという古活字版諸本のどの版に相当するかの詳細な考証は、別に機会をえて行ないたいと思うが、ここには、あえて紙面を費やす所以を述べるにとどめたい。

影印の図版を御覧いただいて、まず目の行くであろう所は、各丁ウラ面左下の、丁付の箇所であろう。化粧断ちによって失われ、必ずしもすべての丁に見出すわけではないが、残った丁付から、新出本が、第七丁から第二十四丁までの零本であること、および本文の続きぐあいからして、その間に落丁のないこと、等が了解される。

零本に残った最初の丁は、軍令が下って、徳川方の諸大名が東海道を押し上る、という場面である。本来勇壮であってしかるべき箇所であるが、哀調をたたえた道行文になっている。ところで、この場面を第七丁の前後に収めるのは、古活字版第三種までの諸本であって、第四種以下では第十二丁あるいは第十三丁の辺にこの記事は載る（その違いは、物

語の冒頭を「珍しからぬことながら……」とするか、「盛んなるものもの衰ふるは……」とするか、がメルクマールになって判断できる。加えて掲出の図版に明らかなく、新出本は各半丁十二行十九字である。この版に相当するものを別表の古活字版『大坂物語』の一覽表のうちに探してみるに、これと版式を同じくするのは、3b第三種異植字版以外に

別表 古活字『大坂物語』の諸版

1 第一種版

一〇行一九字 全38丁 挿画なし 上巻のみ 大形活字 書出し「めつらしからぬ……」

2a 第二種版

一行二〇字 全35丁 別に巻末に城図二丁 原題簽「大坂物かたり上」 読点植版 嵯峨本風活字 書出し「めつらしからぬ……」 成篋堂蔵本に古活字版3aの下巻を補配

2b 第二種異植字版

二行二〇字 全33丁 別に巻首に城図二丁 読点植版 嵯峨本風活字 書出し「めつらしからぬ……」

3a 第三種版

二行二〇字 全60丁（上32、下28）別に上巻に城図二丁を付す 原題簽「大坂物かたり上（下）」 小型活字 書出し「めつらしからぬ……」

ない。

このようにして、その正体に推測がつくのであるが、これで一件落着とすることができない。実は第三種異植字版というのがくせ者なのだ。

小汀文庫旧蔵として『古活字版の研究』に一葉の写真が載せられる以外には、ほとんど何も分らない。その写真と新出本とを比較してみても、活字の同定ができず、同版か否かの判断が付きかねる。せいぜい言えることは新出本の活字が第三種と同じということまでであって、つまり新出本は第三種の異植字版ではあるが、同じく第三種異植字版の小汀旧蔵本と同一かどうかの疑問は未解決なのである。

もし同版ならば、現在所在不明の小汀本出現までの間は、その実体を窺わせる唯一の資料である。しかし、それだけの理由で、数多い『大坂物語』の古活字諸版の一つに拘泥するのではない。この版の存在が、いろいろと問題を蔵する『大坂物語』古活字版諸本の間、本文の変異を考える上で、欠かすことのできない重要な意味をもつらしいと、今回の出現によって推察されることになったのである。

第三種は、大坂方に肩入れしているかに感じられると評される、いささか特異な本文を持つ。第三種異植字版もその名称から同類と考え、深く追及されることなく済まされてきた。しかし新出本に明らかになった範囲で見ると、第三種と内容を同じくせず、大幅に本文を改める第四種と第二種以前との橋渡しをする、むしろそんな内容である。

このことは、古活字版諸本の間における新出本の重要さを意味するだけではない。いま、第三種が大坂方に組した内容であると言われている

3b 第三種異植字版

一 二行一九字 正しくは第三種活字使用の別種（所在不明）

4a 第四種版

一 一行二〇字 全70丁（上40、下30）挿画なし 書出し「盛なるもの、……」

4b 四種異植字版

所在不明

5 第五種版

一 一行二字 全70丁（上40、下30）挿画なし 原題簽「大

さか物語 上（下）」書出し「盛なるもの、……」

6 第六種版

一 二行二〇字 全65丁（上37、下28）書出し「盛成もの、……」

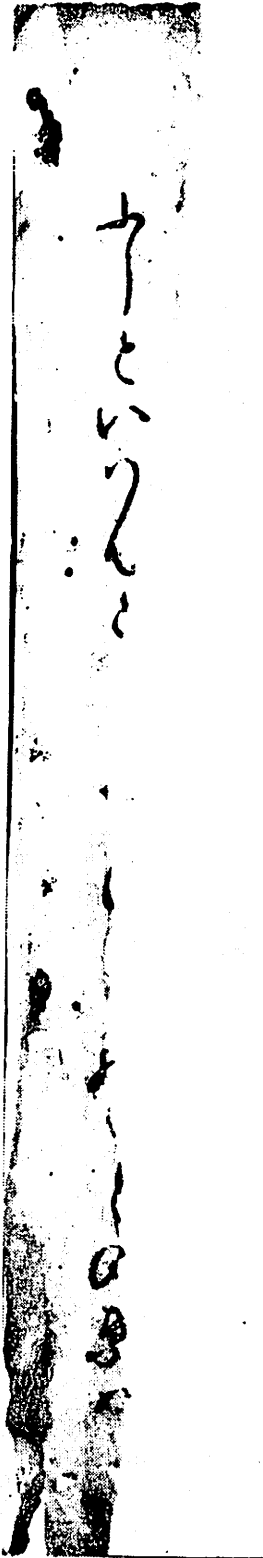
…… 刊記「京四条坊門通／敦賀屋久兵衛」

ことをいったが、もし第三種異植字版が大坂方に組しない、徳川方に肩入れた内容とすることが可能であるならば、いささか厄介なことになる。両版同じ活字の使用であることは、印刷所が同じであった、とせねばならないであろう。しかし、一つの印刷所が、対立する両陣営の注文を、同時に受けるなどということがありえたものかどうか、これはけっして小さくない問題である。その意味からも、新出本は貴重であり、零本ながらも、影印に値する資料、ということになるであろう。

この零本は第七〜二十四丁が残存するといったが、実は、他に第六丁

の末一行分もある。それ以前の丁が外されたとき、かろうじて綴じ目に近い部分が残ったもの。現在は、新しい前見返しに貼りつけられている。本影印に一ページを割くには、あまりに幅が狭すぎる。よって、この解説の後の余白に、別扱いにして載せることにした。末一行といったが、判読に耐えるだけの形を残す文字は少ない。推測を交えてあえて読めば、「ふしといはん」とよみおけるそのこと」の葉は「の十九字であろうか。

終りに、一言。この零本が古活字版『大坂物語』第三種の異植字版と判明して、今まで考えもしなかったことに、はたと思い当った。異植字版という術語は、古活字版研究の用語である。そして、版組や活字の異同を云々する用語であった。それをわれわれ国文学研究者は誤解してなかったか。本文までを含めて異同を言っている言葉だ——と。



海にさらせぬのなら河にうちはしむお物の
うらまをひきかきもはくゆまての人おあふさる
のまふとこゆきとくれやあの家ととくく
とつらばとてあやうと小ほきまきりの
まつとく人くともゆまみあつくさふとハ幡
まもふされたためつてうけもあむらうた
うされいとこやのひやうあめうらうひ
すえうしあをなく原あまのひふれとつら
うらまうけつひもりゆまきひくひくふくま
まのまきまんわめこのつたのらよせまも
なくそらしとららさてたらのオまりの
かまふまはとて馬とらとて遊のま

ふにひふり廻れを若聖なるよのたね葉み祿
のつら〜のあら〜らんものくやせ世ひさく
連なる又うねけ〜路見且たきくろさりなせ
〜ふみもれあれみこれ〜つら〜海を
〜たの河の秋のこれみひ海の山のもみら
〜ふ〜る海〜たり〜れを〜つら
てりまさ〜た〜ん〜もなる〜り
これゆ〜なり〜れを〜らん〜
れ〜る〜る〜る〜る〜る〜る
〜る〜る〜る〜る〜る〜る
と二葉の西海よ〜つら〜た板れせの〜ら
の西海よ〜る〜る〜る〜る〜る〜る

てもそ佐竹系藤本田出まき田河内寺のさ登
う孫め素平丹後守まされすらのやまて山城
京極五校寺同乃んこさりのなま田お備南よを
素平親お越前お伊ねのかりん有堂和泉寺
伊駒さめえお且まのせうまやう素平淡真寺
吉澤えまのうとめさの地るなんこは信濃寺
つちまら安治守素平とこのうと回くやひの
せう同尾張門頭石川とのうのすけわい白井
将監お実流長束九鬼右門守小湊久太飯中島
福満ひしらのうと森右を素平茂彦さかんの四
みれくりと回とわうのうとくら田と恵とん
のりともさそと素平河相市正回直徳と好とて

くみくの流崎新合世義らふとも守えらる
ゆきてとれくせめとらさうけらりてせし
うよそのな流巻よる六川がまぬりなりとも
馬とらひくくうけいさしむれされ中と
せのらのけくを海中へ福おたらぬのうらもり
人数河出してかまふたれをうくやこもり
こもりの巻目たりくせめゆきまきたまうま
ついでた板さしてひきかたりをくみくはえつ
うの志ろとそ、必所まよるおかつりくらせら
あそひのりり巻一まんまきこえはくめも
あきやうぬおえ川たり志ろへけよま鉄砲
とそろへやま海流とらやうと長刀をたけと里

れつらりけりへといひむたりおめいてくれ
しちろのいのちもゆきてつらうとあけすて
まのさねとそろへうへをせんともくさくさ
ともつしつりこさといさうらぬつくてさう
つみをけりせそくくくまと下念さくれけ
まを大坂れつともものともてといひ死人跡さ
けまなくそれ入城中心をけきかれこ
大坂もみたそられのけりともや忠ひらん
大坂さしてひいてゆくをけけめす千人
おくれしといひたり志海ハおらまなりあくお
將軍の母をさす白井お盛を十一月十六日
にぬねてらんほうくらまけく同十七日

カ、愚者の奇子交ハ、赤い道もふれまて、因不
おけくすれ、ちん、う、う、う、う、う、う、う、う、
のて、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
十八日、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
少り、因、因、因、因、因、因、因、因、因、因、因、因、
の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
愚、愚、愚、愚、愚、愚、愚、愚、愚、愚、愚、愚、
の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
福、福、福、福、福、福、福、福、福、福、福、福、
なり、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

舟より又かへ船をのりしり舟より又かへ船
同くせめしりたれしりてきてまき海の
うらへそひいりたるうれしりた板おくら
のりしり鉄炮三十挺やうつらひかうしり
まやうひ一人りるしりしりてりるしり
うせそいりしりしりしりてのりて
五六十人けりしりしりしりしりしり
かひりしりしりしりしりしりしり
うりしりしりしりしりしりしり
せくとしりしりしりしりしり
ひりしりしりしりしりしり
まきしりしりしりしりしり

志内ハ二町ハなりとハハキゴクキクキク
正ヨクくれつく鉄炮とく又長束けのつひ
まきごうしてくくくくくくくくくくく
ひく一丁あまるとしてのくくく又長束
たぬけのよせたれくくくくくくくくく
おのろくをたてまるとくくくくくくく
てささひま出まると下志きくおみとしてよき
よハマシ集まると見せられくくくくく
へつおぬふつ積てまつてうくくくくく
のちちやかれくくくくくくくくくく
おさだけないせんとくくくくくくく
さのもてまよくくくくくくくくく

とくまるまてまをまつとしりおたふのうら
より秀頼のほめれと子本村者門寺とゆめら
てうけりそま河もやまをなひとんとま
つひららうよれやくまんとやうふちくまひの
くんであ馬つわひおまやままじくはまこ
ゆるたらううれまけぬまなひせんとうら
まかりまがの佐竹高城上人ならま小ま志ろ
の母よりも又共清うまおまじらうこまれ
とてたいくおまれしま立面けらうら
おそされたけうおへまう、おあまけんの
うらとやひの長刀をひらまけ地のうけり
まのひまてまをまわらうまを度う

けとゆゑひちくろくろくをすむとわくわく
思ひてくまをもちやくらんと思ふ知り
なりひのちしよひのへさるゆゑ山を越の
つとよら入りつゆのすすれともあくと
るにせよれし藤原とおろしけるに山をく
悉くさくのしんまをまうるまのゆれまの
うけのせせんしくみきりみくまをせんま
もを委ねてせんふつかりてよらんのを
かりありかれをそよまへてわくをな
みかかんゆつしてそわらひつれれ
なるととりふ事なりたのひりりり
ひのすくんでれちまらちのゆるめりり

とらるもつりともくもきつれも勝原の
みえさりけるあまのけりあけりあけり
よせ鉄砲とまひーくうらけりれいさ
てふふろバ目へ引えまうく山をりきり
らんへそひり積りあまらうらのほま
矢野和泉とされとして女路人うら
おひそすまうと山城のうらま
うこれりてたひ六百ふ人とま
あまにけりまをりあまらうら
あまらうらまをりあまらうら
とくみんあまらうらまをりあ
てまをれひとまれの事軍法を
まひ

へつらんすすくそと哀のつこくうんそ一なわ
 ろろしうすすのてつやうの所ふるふひ
 漫遊用にはともや一の山一海のつこ
 返事しよそは母せむふん海せんとのこく
 まれりつりあまゆへこくしこくをまはつり
 しつと不存の他國のまへつてふまをいへ
 りつとててもこらへつてそくの縁とてもたこ
 けなるをえをいへし毎な海ゆるそよのつりあ
 けつりこつとれつりさ竹す人さつてつるなり
 たのそまのつら歳のつらうともさうこそせつ
 つてれそ人のつりつりまなりそんのふんの
 ろしをそつとつりつりつらるれよくらつ山

三途のり見將軍の少おもきれは昨日
のちりれは才濟らんふつりる次の島小
退かす折少く進さくをきれふふ
つくさなれり一安有次第門さ一其て尸をれ
りらへ山城當時目の志わいせてわつへさ
事よりさく其結竹自本おれけりさつり
さく歌とよふつりましくんさうと破る
らうさふお是事山依竹かい甘く存きりいん
つり事おもゆく一姓をさるさつりさ
存しうこつりらまそ山落なさるアしやう
らりおれされけさく山と海のつとあつ
まらいつくさるるをぬ作我よりけりさ

くじもうとちうくとうじふふりすさり
なほひうし源平のうつせんきんあうきん
ひのいくさ中もめのおよすくじてさうとをそ
なまのうけおのて現なりとてうごてのうし
よまけや佐りあうしれ事と取山そのうめ
てらりれてさうとてしとくつら・そもろとつ
かりうのきん禁まゆしましやあようきん
まのけりうしや海とくおあんのんきん
やうおしと進たれしつづれさうやうあう
うとくまさる山志海のうまや生年十七歳
老のきれさうあうんとがめぬ人ようならうと
たりまうしれさうとくまきしやのとらやうと

雪を——右田織部く致みされのP—中も
まきの友とてやりしをてりしひらんおら
ぬゆぢや—あつひハニよりおほおてぬれ
くろりやうてふけたものきへらひ入ふ
とばぬきをけりし物持としきふふろくそ
茶とのまはししるるらみぢりるう—海と
まらとくくあのだけたしよさ—やふりら
ふふたけやうふとてうらひふひくえりら
りきんのなるけやうたてのうけはらう—
いぢ—目うおふくくおききくくせえりら
とららのうらまううれをえりしけつたりの
しげまおひのうらまのうふとて鉄炮をまわ

うらひてうくうのちまきこ織甲のほよるふ
わんうする田はもなほやあな海路うい
ていおふなるこやういしまんに有ける茶の由
坊直らやさんふくさぬともうてち路のこぬ
みる人きふとやにうひれぬよらのこひされ
りともあくわさけのせうてうぬてとまらと
もちまてれひふうもゆらんよあうりたてふ
とへのこよりまてたれと事あうらうと
のうらうりぬこさうりけのこを後まのらんす
うぬと森おともうりけのこをうられたりを
うのまらぬまものきうふとかなりたてふ
ねらまをたむこもこふらぬをね色ーと

いつれけるともぬれあくる福島のを
しくらうのゆりとりよとよらうのけり志き
くしを教ゆうなくふりけきひのきをふりり
あらのうらやますくきこいゆのすけ人数
を卑して鉄砲をこころせわこころをけりゆとの
とらこるけい口だこまて石川直取助家の子弟
オのひふひりつてアのわおとくい
うんまどううあるとりるを我を徳山のつるを
けふふーゆるよゆゆるそれ育てゆともまや
然し一ましらう志んとぬまんでゆほうこう
さつせいしと思ふけりあうらうあらし
んてふいふいふてたるをアけり

まうをぬきぬとも尸義後園とまうらうらう日
より一めいとをぬく人きくひう尸不及び
とめくのすけをまんうくのまやを後けし
すくまうこりぬくらうりあちをまねうの
身勢をもつてせめおとすまうらうら
もやと思ふせいしくまふとひみ子ぬす
るつすんしく思おくれうんとやうらうら
身まうらうらうらうらうらうらうら
身のりうらうらうらうらうらうらうら
小でんと思ふやとをからうの者をれさ
の盡とけを流らうを我の國へひくこを
つ我をたてしを友らうをたうひまうらうら

ふひこつれきとさふいとあつても二世迄とも
らさりのりあすをふりまひつよなりのさし
二子もまゝくらうの瀬へをよする三ろの
うらの志せう鉄砲とう海へ面のうろくく
うらつくれされくもそれおひまらうら
事なれしをむをひけそめまらうれう
くくこかりうらあふとひつ連て赤おせ
まれされようら志おせんとおつれさきて
せめい連し志のうらの志ともゆを鉄砲
るけすてやうなさあことう海へがまらこへ
おておろくおまんともうととも石川の
老をよといふ人をけりし志くせめなれ

志海の中の一の長巻のつとてそそ 世論人うさ
れりり 陸軍共くそと志海れるやいりううふ
たてこもり表をいりつんぞとりからやううよ
しらそつうものつとちさのゆるきものとも
てきれうう海をましましきと志ろのうらうら
うのりーとややりひらんらんはとさーてり
てりやりやー終本田を大坂ふりけりい
うーとまきとじんしとてへりけ出る石河原
すくまをうさーんそりれめつそくくま
すくまたつゆけーとやがもいんまんしへ
みけこもり森を本さふとよとたそしーろ
つめをみれーろーろんはうんとり

そお守の逢事一もそえんをせよなほそま
ひしし一うはめなほそはありふとつれ
ひしし一もそえんをせよなほそま
とつれなほそえんをせよなほそま
うくつらなほそえんをせよなほそま
とつれなほそえんをせよなほそま

しつらなほそえんをせよなほそま
すくまなほそえんをせよなほそま
人教とせしつらなほそえんをせよなほそま
志たりとせしつらなほそえんをせよなほそま
面目たよそえんをせよなほそま
おしつらなほそえんをせよなほそま

おとてふおとてふきわむと　ひねんまれのま
れやうりてきんし　まらとこやふらほし
てふまをつあひふりせんらなふをせん
存れきりのやとや　又無徳む可徳とつを
まねてしへ大とつけて黒井とらうおやま
あくらりちとわらわきをくまもやせん
しとらやふすんを付入張まよとのせと下
きうはぬれとしてをるはけとらくりあ
けくはきれともてをみかたらの肉へ到て
入目つうおのこは老を女よ人おとめて
のらんおひふりぬと　書平徳興お守まね
後分りらげとて　てうきわの事　てんりら

はがや城入戸川おせよらんと思ふらておほ
かれらう坊ひ六七おほきせめ口見に出る
まろちちやくうらふすれしころのうらより
まらぬゆりよておほきなり正家くうらより
よらのうら大書のをてまをらせむふとて肉
のやはけいへの鉄砲とうこぬそく海くすまの
ほきよらのうらなくさくさんとをまらうら
とれうらちちてつらう二川うらうらまき英福
つらうらうらまきまきまきまきまきまきまき
うらまらうらまき鳥打とまう危換りまきま
むらてうらうら坊ひ目の下にうらまきまき
うらまきまきまきまきまきまきまきまきまき

れうろれくともたりにるお十時や
らうろけるてそうちらにけるれを
まわわさう中塚疎よりひうへ
右のひまは左のえくのねよりうら
され馬もわさうと海おとや
ゆつまさじに
ゆもれらるさをのさらの
鉄砲はふようなり
とんをへけるおもわちる
とちりひこみ
えんしきとひてきうね
ていそののれ
たりあきとみる人
うらやうんれ海さじね
やさうりさのて
ひさうら一のり
おあさう
たふし大事のこ
くら本よ戸おこふる
と
くねんをれを
まわわらひ
らる裏よ
たごち

しとと井よ一ちのうさよつまほきり
あつまじしやなれ車のまじくもをりも
ひのますの致もつられもとそりななり
されてまぢあまをさくわらんむぢよあさけ
らたけりさよじねんたれつうふぢうせめ
きんとすくそけつそのさる共田左末門助
たてこりたゑかのまんふさくぬとまやゆ
そのつりしえろまじ焼炮消つてつてつ
うせせり書平鏡かるえ手りな田めつ寄
河かまののゆくぬよこまわさる老をさう
とらしやひまふたひくくとあつらへ
の目ふさしよせ藤よとあつらまき

とゆき能るうれも歌よや必もせす不書
お世し人証入見せりさしてふそちろのりり
つひまこりちあくみせ一人日なりよせても
きうさあつがまてひんとすうあよあまこ
ちろのやきりよまわりのまひつろくをあく山
よせあそつまふちり張志路ふら目よみせ
さらもまは通くもは程めて何くうよとこそ
りあていゆはあくちもいもくい志路へうく
らせぬ入いくさくつそしんとそきりり
わそのつまもつともを存よしんをてさひ
かりまうされよつくられりら是をみく流り
ひくくまをて目しんをたよとせかりへ

おんまはくをばりし急く去りしはけり
うらまをりまの申りしは新あが將のこゝろ
三途のうちへ由道れ子細やまらんあまも人
あれを申しらへりまがのまをよせけりへ
とひ入くりしまをりそけくらとりのほ
十回おと思えよまのむをとりのちちひお
こなりうらの甲ふくまをつあまやうく
ひのしをまをまをさつてけりしは
まののうらと思えてよらひの袖入りまを
つりけり事よりとてひかしくじま茂老を
つれにあうらんもるおよかいくさのちまを
わくれとまをひらけりやあまをれせし

まなれともなほともほめてのなまての
力をひかぬまのめとれまのめと二うま
うらうこれなれまのめとれまのめと
ほりうまへともひまのめとれまのめと
やうなておりけりまのめとれまのめと
ともひかぬまのめとれまのめと
つけてまのめとれまのめとれまのめと
あまのめとれまのめとれまのめと
まのめとれまのめとれまのめと
めまのめとれまのめとれまのめと
めとれまのめとれまのめとれまのめと
くほりうまへともひまのめとれまのめと

いさくとうらなり山口乃一番なり伊井の
かりんの助とかのろとちりよりや里長のを
そろへはふおとくよきふらう十二月三
日の夜半ちまをそふせや日のあけやうり
れややゆきたりみくこ二百よりえうこまをれ
との後らんもはくうくと三ろのゆいも合る者
もなり町とらうを流お寺のうらに山崎ん
さいとをわうまじしやら流者なりPけらひ
ぼらんもはくかぬよ町くてドあくをら
をたうしみ町さおてをい死ん出来んし
ふはのう船ぬへとPうものうとも町く存れ
あうとまらうんまいのう船ぬへやうよ果敢

をまらつたの世路へとたぐひよとれとうの世
しうんさいアキラをほ輝のやくみさかす
糸海とせれまけさしあ波守ものつれかりき
とみてい井れかきん難家流もひつらりのおふ
ぬめされりきとくは流成老あとおさうりて
ひまなれし城はうらまををきてあつたれ
あうの志るあはあじやうのけりまらちく
よききらのつらまのいけらふ志りの目よわ
うよまといひくま共今あとりひの世路ふい
ううううとんまいとこへてひまたなくもひ
うせのふまのつねるるあせぬへとあしと
びくはまらじやうをすりあへるすりの

とて刀をうらふに又六乃んらうとて一に
返れられぬ人々何一里もとらぬ(人の神)
まゝに付ひさしくつてそつ包をひのみに
もこれとみくつれつを悉いゆうた
道のゆゑともめらんとや一と一
かのちとけい先とたるやうへに新茶少將の
は才小書平が羽音とて少卒十五小なる世
のへたぐひなさ事一ともなりつくまゝ
はまやうとんもはちんとよぢうれたはふそ
縁山が軍ハ番山一りはちんとかきれん
危うなる右をなへ馬まよりめとるへ
ちんの中うへ二里三里回本小うら

るしちふそわふ地なりしはねたも天祿福祿も
なかなふ志うき々々もや冬だつそりのなほひ
かりみゆりもみまのなまごころをかくまのくれ
そつてはふのけらんちちののりてりぬ日
うけものくくりまれしうんよ下もかふ志ぬ
すまふ九國の乗とそゆまきさだうり自由
かれし旅くん勢にまじひいしく園来の
いにくとうときみもくまうは太極と中一海
の若川やうくしりおひかたやとくねし
森長門も福嶋飯後寺川つとそまふ苗つとそ
の清鏡りり家とそてなうの色おらんくい
そふも大竹とひしふまうみましけら

女三

たゞをばくをたるたもつとらひひろ
さすみまよはさくれとみおさる藤次院に
もかへひうひてなれ抱くはくこり下せ
つうとそなりよけさてようよせてと自
由なれ表よもまち口よを城の周より中ける
へ大いふはるとむけられゆり討たれと
ゆくさよとんぬりてしとそよむつらとら
有堂和泉寺らんまをきりつとそとらふ
用まつぬとのれらりやうなからう人金銀
おめてはてこむるとりよたつてをぬら
いれらるるういしく西のひらふと
おこゆうしいはらるるくさやとらふ

もやうつまきろのくらをゆかきんすまき
ちかろらちりりてんみのゆや
あうめんへ西じや、忠臣二君にけりへ
り申きりぬひらり我おりらう人をおふ
こうそよのひあきかたらうをんを
うら流らせ川とたえなりはつんふらのえり
お泉寺のやうなりうらまゝのやまはま
あひまうめんくのやをからうたれぬ
まてらえろへい運たきんたとそりけい
ひのりものもものごとくやれらるる鉄炮
をもつてけりけりらうおたれまといとそ
まらひのうられは善業左東門のろとえま

くろり？このたては又丁をうたて町中橋の上
に決てふりゆきくららのうらまをうけつん
と二丁なりてふれ志ゆきしうらまをうたれ
ひまはこさんやすれぬのゆもむせむんや
なぐたてとすて竹尻しうりのうらまをうたれ
くららの内しりりけるせくららのねのたて
すてゆふそくせゆふぬおまじしなるたて
ひけまじしとすてゆふぬおまじしなるたて
河田た来左衛門といふたつりたまをうた
りまじりりりりつ子くならぬえくらをい
ぬらまじりりりりりりりりりりりりりりり
らららららららららららららららららららら

登りしく海らねの尻を二つとてしつらうとて
二三十人しやもれせまぐりしつらうとて
やま／＼とつらうらまゝとておらと
かまゝと太衆はへりしつらうとて
さろせりらんせつらうとて
つらうとておらまゝとて大鉄砲とて
かまゝとておらまゝとてしつらうとて
うら／＼とておらまゝとてしつらうとて
たてとておらまゝとてしつらうとて
のつらうとておらまゝとてしつらうとて
たれ又十二月とておらまゝとてしつらうとて
とつらうとておらまゝとてしつらうとて